

平成19年度
発生予察情報

特殊報第5号

平成20年1月16日
埼玉県病害虫防除所
(TEL:048-525-0747)

ツマグロヒョウモン幼虫によるパンジー等の被害について

ツマグロヒョウモン (*Argyreus hyperbius*) は、タテハチョウ科の美しい蝶です。幼虫の食草はスミレ属です。パンジーなどを食害し、大きな被害を生じる恐れがあります。本県は花壇苗としてパンジー類の生産が盛んです。今後、ツマグロヒョウモンの発生には十分な注意が必要です。

特殊報：新奇な有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異的な現象が認められた場合に発表するものです。

1 病害虫名 ツマグロヒョウモン (*Argyreus hyperbius*)

2 発生経過

近年、県内各地で色鮮やかな中型の蝶が散見されるようになった。平成18年、埼玉県花と緑の振興センターで、体色が黒く棘を持ち背中に赤い筋がある鱗翅目の幼虫がパンジーを食害しているのが観察された。形態からツマグロヒョウモンの幼虫と確認した。また、県内のパンジー生産ほ場など各所でツマグロヒョウモンの成虫が採取されている。

3 形態及び発生生態

(1) 形態

成虫の前翅は38～45mm程度。翅の様子は雌雄で異なる。

雌の前翅の先端部は黒色で白い帯が横断している。翅のほぼ全面に黒い斑点が散る。前翅の裏は薄い黄褐色の地にやや濃い黄褐色の斑点があり、表の白い帯の部分はやはり白く根元はピンクである。後翅の表は黄褐色で、全面に黒い斑点が散る。後翅の裏は白地に黄褐色の豹柄の斑点が散る。

雄の翅は全体的に豹柄で、後翅の外縁が黒く縁取られる。

幼虫は終齢幼虫で体長30mm程度、全体に黒色で、背に1本赤い筋が縦にある。体節ごとに6本の分枝した棘状の突起がある。突起は身体前方4、5節は黒いが後方のものは根元が赤く先が黒い。一見毒虫の様であるが、突起で刺すことは無く、毒も持たない。

(2) 発生経過及び生態

本種は本来南西諸島から九州、四国、本州南西部に生息していた。1980年代に近畿地方以西の本州でも見られるようになり、徐々に生息域を拡大して

きた。

1990年代以降は東海地方から関東南部地域及び富山県、新潟県の平野部で観察されるようになった。2002年以降は北関東でも目撃情報が寄せられるようになり、現在は北関東でも頻繁に観察されるようになった。

成虫は4月から11月頃まで見られ、その間に4、5回発生する。他のヒョウモン類の蝶が年1回の発生であるのに対し、本種は多化性である。冬期は幼虫や蛹で越冬する。

(3) 被害

本種は幼虫時代にスミレ属を食草とし、パンジーなども食害する。1株を食い尽くすと、地表を移動して次々と食害を繰り返す。

本県は花壇苗としてパンジー類の生産が多いため、今後の発生に注意が必要である。

4 防除対策等

(1) 本種に対する登録農薬は無いが、花き・観葉植物で鱗翅目の幼虫に登録されているものがある。

(2) 施設の開口部を防虫ネットで覆い、成虫の侵入を防ぐ。

露地栽培では寒冷紗等でトンネル被覆し外部からの成虫の侵入を防止する。

これらの物理的防除法を中心とした総合防除対策を行う。

(3) 施設内部やほ場周辺のスミレ属の雑草は発生源となるため、施設内外のこれらの雑草は除去する。



雌成虫翅の特徴



雄成虫翅の特徴



雌成虫の翅の裏側



雄成虫の翅裏側



パンジーを食害する幼虫



幼虫の背中の鮮やかな筋

写真提供「埼玉県環境科学国際センター自然環境担当」

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 スピードスプレーを使用した防除ではドリフトが発生しやすいので、風のない日に適正な方法で散布する。
- 6 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。